

## 「追憶の水輪」 中島 讚良

初富士を正客とせんティータイム  
蝉林の残る蟬穴淑氣満つ  
藁灰の端正な嵩春火桶  
点滴を音と記憶す春の暁  
地球儀に上下ありけり四月馬鹿  
黄昏の足踏みしたる花明り  
嬰の瞳まだ雲をとらへず絮たんぽぼ  
余花白し山のひかりをあつめては  
流木として長き日々梅雨に入る  
ガラス器の音のいろいろ夏料理  
水打つて土の正氣を戻したる  
熱砂踏む足裏一瞬闇のごと  
向日葵は長き看取りの終の花  
鳥葬の鳥を選びをり夏の夢

白日傘外に使ひし顔入れて  
風鈴の音は金色南部鉄  
夏風邪の味蕾の鋗や薄荷糖  
処暑の日の背広は男の戦闘服  
しつかりと食べて秋思と言ふ女  
星月夜をとこの夢の尾鱗かな  
打ち始め魚板の窪の冬陽飛ぶ  
革ジャンの屈折したる若さかな  
白樺の白を骨とし山眠る  
父の忌や煮凝り出来ぬ土地に嫁し  
孫もゐて雪遊びする野辺送り  
桜までさくらまではと雪に逝く  
捨て傘の赤は枯野の痛みかな  
立冬の根のあるものの起ちし影  
天に根を張りたるごとく枯木立